

序 説

検査薬として ^{18}F -フルオロデオキシグルコース(FDG)を投与し、その集積分布を画像化するポジトロン放出断層撮像法(PET)検査では、多くの活動性の腫瘍巣を検索することができる。ここで用いるFDGは、悪性腫瘍に特異的な放射性医薬品ではなく、糖代謝の亢進部位に留まっているにすぎない。良性腫瘍や非腫瘍性病変、正常臓器にも集積するため、FDGの集積を見つけてもそれが何を表しているのか、意味付けが必要となる。解釈が容易な場合がある一方で、集積が何を意味するのか、そもそも臨床的に意味ある集積として拾い上げるべきなのか、難渋することもまれではない。画像のみで確定するわけではないため、各集積が意味するところの可能性を挙げ、生検で確定すればよいが、すべての集積に対する組織学的確定は必ずしも現実的とはいえず、仮に生検を勧めた病変が臨床的に意義の低い病変の結果ばかり返ってくると、イソップ物語のオオカミ少年のごとく、本当に必要なときに適切な処置の遅れにつながるかもしれない。また生検は侵襲を伴い、コストがかかる。サンプリングエラーのために結論に至らないこともある。病期診断目的と検診目的、あるいは同じ再発診断でも術後の腫瘍マーカー上昇の場合と臨床的には転移や再発が疑われていない、いわゆる定期的なフォローアップの場合とでは、曖昧な集積をみた場合にどう考えるか、次に何をなすべきか(静観も含めて)、経験を重ねてくると無意識に所見を書き分けているものと思われる。すなわち、検査前確率に基づいた、的確な所見・コメントを依頼科に提供することが読影医には期待されている。

本特集では、読影対象となる画像は同じであっても、読影時の情報に基づいてレポートが変化するところに焦点をあて、それぞれの症例について異なる状況を設定し、各状況下での所見例をエキスパートの先生方に記載していただいた。目の前の画像を読影するうえでさまざまなことに思いを巡らせて能動的にレポートを作成している(症例によっては通常と異なる撮像範囲を設定する)達人のプロフェッショナリズムを味わって、今後の診療に役立ててもらえたら幸いである。

本誌の読者層は当然ながら画像診断医が中心と考えられるが、依頼コメントを軽視している各診療科のオーダー医にも一読してもらいたいものである。依頼コメントによってレポートの内容が変わりうることは日々実感するところだが、依頼医のなかには画像さえあれば所見がなくても何とでもなると考えているのか、的確な依頼コメントが提供されていない場合も少なくない。治療方針に必要な情報がときに依頼コメントに影響を受けることが認識され、画像診断が共同作業の一面も有することを認識してもらえると、お互いに得るものが多いのではと推察している。

いずれの立場にしても、今回のような教訓症例を通じて、積極的に必要な情報を集め、次のステップにつながる画像診断に少しでも寄与することができればと願っている。

中本裕士